地域の文化を知る授業として民俗を取り上げることについて

武市　伸幸

１．学習指導要領における地域文化の取扱い

学校教育における地域の文化の取扱いについて、平成29年度告示の中学学習指導用要領解説社会編（文部科学省，2017）では、「第１章総説」の「２．社会科改定の趣旨及び要点」の歴史的分野の「オ．様々な伝統文化の学習内容の充実」の「⑵　身近な地域の歴史」において、「具体的な事柄を通して受け継がれてきた伝統や文化への関心を高めることや、各中項目における伝統や文化の特色の理解につながる授業」を求めている。ここでいう「伝統文化」とは、具体的には「琉球文化やアイヌの文化」を取り上げてと記されていること（p.20)、および、学習指導要領解説の「第２章社会科の目標及び内容」の「第２節各分野の目標及び内容」の「２．歴史的分野の目標及び内容の取扱い」に、「伝統や文化」を学ぶためには「博物館、郷土資料館などの地域の施設の活用や地域の人々の協力も考慮」して、と記されているように、史料として遺された文字や資料、文化財を重視していると考えられる。

民俗学者の菊池（2022）は、時を超えて伝わる資料は文字（記号)、モノ、(身体的）記憶の３つに分けることができるとし、文字は歴史学、モノは考古学、記憶は民俗学に該当しているとしている。筆者は、地域の文化を知るには博物館や郷土資料館に保存されている資料のみならず、菊池のいう（身体的）記憶（文字やモノで残されていない資料）を学ぶことも重要と考え、高知県を例として取り上げ、将来教員となる学生たちに恋愛、結婚、出産、名付け、葬式などの儀礼についての授業を行い、土佐の人々のかつての生活様式や考え方を示すとともに、学生たちには自分たちの出身地の結婚式や葬式の経験を書かせ、地域の文化に対する認識を深めさせようとした。

また、菊池（2022）は民俗学について、民俗学は人間の一生を考える学問で、その目的を民俗学の創始者柳田國男の言葉を借りて「普通の人々の日々の暮らし、それが現在に至った来歴を解き明かすこと」にあるとしている。このように考えると、民俗学は過去の人々の生活様式を考える学問ととらわれがちであ

るが、常光（1997）が学校の怪談を研究するきっかけで述べているように、現代に生きる人々の生活様式や考え方もまた民俗であり、菊池もこのような観点から民俗学をまとめている（菊池, 2022）。そこで学生たちに課した課題では学生たちの恋愛・結婚、名付け、仕事などについても選択肢を設け、これから生きていく上で重要なこれらの項目について考えさせようとした。

2．学生に課した課題と学生の記述

今回地域の文化を考えることを目的として学生たちに課した課題を次に示す。学生にはこの中から１つ選んで書くように指示したが、複数の項目について書いている学生も多数いた。

①みなさんの故郷の結婚式の様子やしきたり、あなたの感想や思い出。
②みなさんの故郷の葬式の様子やしきたり、あなたの感想や思い出。
③みなさんの故郷あるいはご家庭のお正月やお盆等のしきたり。あるいはお正月やお盆等についてのみなさんの思い出。
④みなさんの恋愛・結婚観。
⑤みなさんの名の由来ないし自分の子供にどのような名を付けたいか。その理由。
⑥みなさんの故郷に伝わる伝説・民話について。その内容も。
⑦みなさんの仕事に関する考え方について。その理由も。
⑧みなさんの死生観について。

上記の課題について、提出のあった学生は21人で、学生たちが選んだ項目（複数の項目の記述可）は①３人、②５人、③９人、④５人、⑤４人、⑥２人、⑦５人、⑧１人であった。以下、各項目について学生のレポート例を示す。

⑴　結婚式

授業時に明治時代末期から昭和時代初期にかけての高知県における結婚式の儀礼（結婚の申し込み→結納→祝言）を説明したうえで、学生の出身地の結婚式の儀礼を書かせた。

［滋賀県の結婚式］

滋賀県で結婚式を開こうと考えたときには、主に以下のような流れで結婚式を迎えることが多い。①プロポーズ。実家へのご挨拶。②貴芽酒（地域による）。③結納式。④結納返し。⑤結婚式に向けての事前準備。⑥挙式。⑦

挨拶回り（地域による）と、一般的な結婚式とほとんど変わらないのが特徴的。②の貴芽酒は滋賀県特有で、湖北地方に残る風習である。主な目的としては結納の日取りを決めていくことが目的だが、日取りを決めるのに女性側の家にするめとお酒を持っていかなくてはいけない。全国でもお酒を持っていくという行為自体はあるが、呼び方が地域によって異なる。他の地域では「結び酒」、「根切り」、「すみ酒」など違った言い方がある。また、滋賀県には琵琶湖を中心に地域が東西南北と分かれているので、場所によって引き出物のしきたりが異なる。長浜市周辺では「おちつきぼた餅」という引き出物を用意することが多く、「家に落ち着くように」という意味がある。ただ、湖北地方では「生鯛」を渡すこともあったり、信楽焼を渡したりと、地域によってさまざまである。

この学生は授業で取り上げた高知県の結婚の手順と同じように滋賀県でも結婚の儀式が行われていることを述べるとともに、結納の日取りを決める際に持参するものに地域差があることに気付いている。また滋賀県内でも地域の特性を生かして引き出物に地域差があることにも気付いている。

⑵　葬式

授業では臨終から通夜、葬儀、埋葬について、高知県における各段階でのかつての儀式を説明し、人生の始まりの出産と人生の終了の葬儀の類似点を述べた。

［(タイトルなし)］

通夜式のあとに食事をふるまうことを「通夜ぶるまい」といい、僧侶や一般参列者も参加して、その人たちにお酒や料理を提供すると思いますが、兵庫県のものは通常のものとは違い、親族のみで行われるものが多いと思います。そのため、一般参列者はお焼香や通夜式が終わると帰ります。このように、“通夜式後の食事は身内だけでとる”といった習慣は関西地方ではよくみられます。また、葬儀、告別式の当日の食事としては、出棺後から火葬を待っているうちに、精進料理を食べて、骨上げののちに初七日法要を行う流れが近年は主流のようです。また、近年は葬式への考え方も変化していて、葬式のスタイルもいろいろなタイプから好みのものを選べる時代になっています。身内だけで落ち着いたお別れをしたいという要望の高まりから、全国的に「家族葬」が増えているそうです。兵庫県でも家族葬が主流になってきていて、参列者も、家族葬が多いことから、親族を中心とした10名～20名程度

が平均的な数のようです。

この学生は葬式の際の食事の地域差を考えるとともに、近年の葬式の変化についても触れている。ここで、初七日法要は初七日の意味を考えると本葬の直後に行うのは不適当と思われるが、忙しくてなかなか集まることができない現代人の都合より本葬の際に行うことが主流となってきている。これは「とにかく初七日法要を行えばよい」という現代人の考えを表しているものと考えられる。

⑶　お正月やお盆

［お盆について］

自分はお盆になると毎年母方の実家のある大阪府豊中市まで行きます。幼いころの自分は、こんな暑い中、長い時間をかけて墓参りとかと思っていました。しかし、小学６年生の頃、祖父が亡くなり、初めて身近な人の死というものを知りました。自分の知っている人の墓参りと知らない人の墓参りというものは、そもそも墓参りに対する心構えというか、墓参りに対する見方が違うと思います。決して墓参り自体が楽しかったということはないのですが、それでも毎年お盆の時期になると絶対に故人のことを思い出すことができ、どこか安心することができると思います。こうして改めて考えてみると、その墓に故人がいるわけでもないのに、皆墓参りに対して何かしらの感情を抱くのはエゴだと思いました。そこには自分が忘れないことによる安心という自己満足があると思います。しかし、この行為が一種の葬式であるというふうに考えてみれば、墓参りという行為は食事前の挨拶や宗教上における行動。それこそルーティン等も同じで、何気ない人としての文化と思えば、それは年間を通しての生活の一部なのだと思え、腑に落ちました。

この学生はお盆の墓参りの意味を祖父の死を通して考え始め、葬式の習俗に関する授業を通して、墓参りは人の文化の一部であり、年間の行事に組み込まれたものと位置付けている。このように墓参りの意義を考えるきっかけとなったとすれば、授業の意義はあったということになり、授業者としては嬉しいことである。

⑷　恋愛・結婚観

［恋愛・結婚］

僕の思う恋愛と結婚は全く別物だと思っていて、恋愛とはただ好きという気持ちだけでできるけど、結婚となってくると好きだけではいけなくなると思っていて、なぜかというと、結婚となると相手もそうだし、相手の親であったり、親戚、子どもが生まれるなら子どももというふうにさまざまな人と関わるようになり、そうなるとそれに伴って様々な責任が増えてくるので、恋愛と結婚は全くの別物で、特に結婚は容易にできるものではないと考えている。

［恋愛・結婚観］

ぼくが思った恋愛・結婚観は、恋愛とはただ好きという気持ちだけで成立することだが、結婚は他にもいろいろなことが大切になると思います。相手のいろんなところを見て、ずっと暮らしていけるかや経済面など真剣に考えていかないといけないことだと思っています。相手のことをしっかり分かってダメな部分も受け入れていくぐらいの覚悟がないと成立しないと思っています。結婚するということは、死ぬまでずっとお金がかかっていくと思うし、子どもができたらもっとお金がかかると思うので、経済面もしっかり考えてやっていかないといけないと思います。

２人の文章に共通しているのは、恋愛と結婚は別物であり、結婚はただ好きだけでは成立せず、社会的・経済的側面も考慮しなくてはならないということである。このように現在の若者もしっかりとした結婚観を持っていることがわかるレポートであった。

⑸　名の由来・名付け

自分の名前の由来についてレポートした学生たちは、よく考えて名前を付けてくれた両親の想いを生かすようにしたいと書いていた。また、自分の子どもには今はやりのキラキラネームではなく、このように育ってほしいという願いを込めて名前を付けたいと書いていた。

⑹　伝説・民話

大分県と兵庫県の伝説についてのレポートが見られた。伝説・民話については稿を改めて考えたい。

⑺　仕事

仕事についての考えにはいろいろな意見が見られた。

［仕事について］

自分がやりたいことを仕事にしてやることが一番良いと思います。なぜなら、自分の性格上興味あることにはとても頑張ることができるけど、誰かに言われてからやったものや、興味のない事に関しては、無駄なことをしているなと思ってしまうし、好きなものじゃないと続かないからです。

自分は小さい頃習い事をたくさんしていました。しかし、サッカー以外、数カ月でやめたり、数年でやめたりしました。その経験から、やりたいことをやるのが一番良いと思いました。あとは、楽しんで仕事をしている人は自分の得意なことを生かして仕事をしていたり、本当にやりたいこと事をしていたりしているし、得意な事を活かして仕事をしたりした方が、上達のスピードなども早くて、さらにモチベーションも上がると思う。

［(タイトルなし)］

私が考える仕事に対する考えは「生きること」だと思います。何故そんなことを考えたのかというと、まず働かないと賃金がもらえません。賃金がもらえないとご飯も食べられない家も買えないなどなど、生きられないからです。仕事をして楽しいということはあまりないと思います。自分の好きな分野を仕事にできたとしても、絶対に苦しいときがくるし、うまくいかないときがあると思います。この世の中、得意分野で仕事をできたとしても、すぐクビになったり倒産したりすることが多いと思います。例で例えると、一番想像しやすいのはプロスポーツ選手。プロ選手は自分が好きなスポーツを極めてプロになった人が多いけど、結果が出なければすぐクビになります。クビと常に隣り合わせだからプロになれば楽しいということはあまりないと思います。働かないと「生きられない」というのはこんな考えから生まれました。

その他、不公平をなくすため、働いた分だけ報酬を得ることができる仕事に就きたいという意見も見られた。なお、人のために役立つ仕事をしたいという意見は、今回は見られなかった。

⑻　死生観

［自分の死生観について］

私は死んだら終わりと考えているので、死んだら自分の体も物も自分のものではなくなると考えています。なので、お墓も死んだ人の為ではなく、生きている人がその人のことを思い出したり、こういう人がいたんだと思いをはせるための、生きている人のために建てる物だと考えているので、自分が死んでもお墓もお葬式も別にいらないと考えています。しかし、この考えを押し付けようとは思っていないので、親が死んだ時は親の意向に沿うようにしようと考えています。

葬式の習俗の授業で、出産儀礼と葬送儀礼は共通するところが多いことを説明し、昔の人の死者に対する考え方も説明したので、現代の若者の死生観についても問うてみた。このテーマで書いた学生は１人であったが、死後の世界の存在を否定する文章となっており、ドライな現代人の考え方を表していると考えられる。

３．おわりに

本稿では地域の文化を習俗や若者の考え方の視点から取り上げた。これは、中学校や高等学校で地域の文化を教える際、文献史料で残っているものだけが文化ではなく、人々の考え方や儀式･儀礼も地域の文化であると知ってほしかったからである。地理教育学者の三澤勝衛は、地理を教えるものは野外に立って地域を観察すべき（三澤，1937）と述べているが、地域を教える際にはその地域の習俗や人々の考え方も考慮できる教員になってほしいと望んでいる。

参考文献

・菊池　暁（2022）:『民俗学入門』．岩波文庫.
・常光　徹（1997）:『民俗学の手帳から　うわさと俗信』．高知新聞社.
・文部科学省（2017）:『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説　社会編』.
・三澤勝衛（1937）:『新地理教育論』．古今書院.